

口頭発表「降雪地石川での学校動物飼育実践」

田村 兼人



石川県での学校動物飼育についてご報告させていただきます。石川県獣医師会では、現在のところ3市町（金沢市、内灘町、かほく市）で教育委員会と獣医師会との連携の下、定期訪問、飼育相談、学校飼育動物の診療、学校の動物を使用したふれあい教室への協力、授業への協力、飼育担当児童や教職員等に対する研修などを業務内容として実施しています。ふれあい授業に関しては、平成23年度より新学習指導要領が小学校で全面実施されたことから、低学年（1年生、2年生）に対して希望される学校が多くなってきています。また、獣医師会の開業部会において学校飼育動物対策委員会を設け、主に非連携地域からの依頼に対して、①ふれあい授業、②飼育相談、③無料での治療などの活動を行っています。

今回の発表に際し、石川県下の小学校226校にアンケート調査を実施しました。回答率100%の中、動物飼育を実施している学校

は136校（60%）でした。県内を3地区（能登地区、金沢近郊、加賀地区）に分け飼育状況をみると、地域差が大きく認められたこと、更には、獣医師会と教育委員会の連携地域では100%近い飼育率であることなど、今後の取り組みの参考となる結果も得られました。（図1）

飼育活動は、委員会飼育が60%、学年飼育が40%という結果で、その担当学年は委員会飼育では、ほとんどが5年生、6年生、学年飼育では4年生が中心との結果でした。（図2）飼育動物の種別割合は、ウサギ、モ

飼育動物種別割合

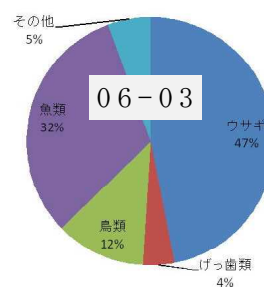


図2

飼育上の問題点と課題



図3

石川県の学校動物飼育状況

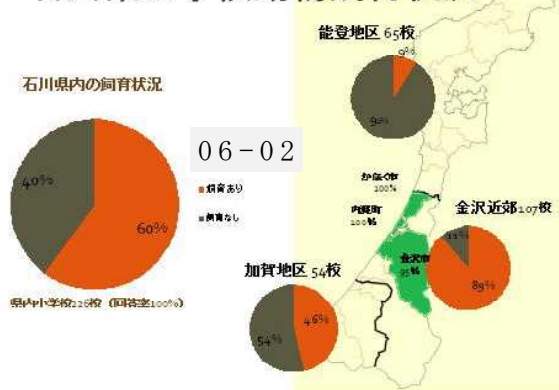


図1

ルモットなど哺乳類の割合は51%と思いのほか少ない結果でした（図3）。

石川県は、県内全域が豪雪地帯とされています。加えて、1年を通して降水量が多く2010年の調査では年間降水量全国第3位、

年間雨日数全国第2位という結果が出ています。このような環境下で、県内各小学校の動物飼育上の問題点を拾い上げてみると、最も気にかけている点としては、環境面と動物の健康面に関してでした。環境面において、夏季は高温多湿な地域であるが故、換気に注意を払っていることがうかがえます。冬季では、湿気を多く含む降雪があるため、波板などの防護板で飼育舎を囲って風雪の防護を行っているところがほとんどでした。健康面での不安としては、高齢化していく動物に対して、病気時の対応について等の回答が多く見られました。

現場の教師が、飼育を行っている子供たちへの指導としては、季節に関係なく手洗い、うがい、手袋の着用など衛生面に関してのものでした。一方で、無回答の学校も多く認められたことから、教師自身の飼育指導の知識不足や、それに伴う不安を垣間見ることができました。（図4）

季節による児童への飼育指導

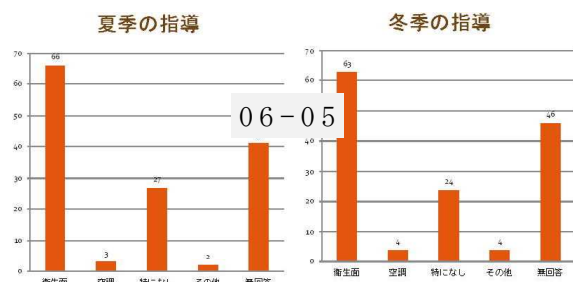


図4

学校飼育動物に獣医師として係るようになり12年になりますが、手探りではじめて今日まで多くの子供たちと接し、沢山の事を学ぶこともできました。その中で、命の授業として行ってきた「ふれあい授業」について述べたいと思います。

「生きている証拠を教えてください。」
ふれあい授業は、この言葉で始まります。子供たちの意見を聞くと、ほとんどの子供たちは、動く、食べるなど目で見えること（視覚的事項）や、心臓が動いているなど（知識的事項）の証拠を発表してくれます。つぎに、人と動物との共通点を確認し、外観は違うが体のつくりや働き、感覚は人と同じであるということを理解してもらいます。

そして、実際にウサギを抱いてのふれあいに進みます。

そこで、言葉は通じないがやさしい気持ちで抱いてあげることで、ウサギが安心していることを感じてもらいます。はじめ緊張していた子供たちも、ウサギを抱くとみんな優しい笑顔になります。この笑顔が、言葉では伝えられない多くのものを感じとった瞬間です。私は、この「ふれあい授業」を通して生きているということ子供たちに感じてもらうことを最重要事項として掲げています。（図5）

ふれあい授業



図5

この授業の最後にウサギを抱いたことで何を感じ、そこで新たに発見した「生きている証拠」を発表してもらいます。そこで子供たちの口から出る新たな「生きている証拠」は、「温かい」ということ。この言葉こそが子供たちが命を感じた証拠です。

昨年10月、ある小学校からウサギが動かなくて様子がおかしいとの連絡があり当院で治療を行いました。脳神経症状を呈し治療経過をみる間もなく死亡しました。電話で死亡を報告したところ担当教師は、これまで飼育動物が亡くなった際、子供たちにはその事実は知らせるが、遺体は教師が校庭の片隅に埋葬していたとのことでした。遺体を見せることで子供たちの精神的な動揺を心配しての配慮でした。

私は、亡くなったウサギは、一緒に学校で生活していた仲間であり、みんなで見送ることを提案しました。その日の放課後、死に至った経緯を子供たちに説明することとなりました。硬直したウサギを前に無言で見つめる子供たちでしたが、一人ずつ体を撫でてお別れをしていると、我慢していたものが目から溢れ出てきていました。冷たくなったウサギに触れることで、その冷たさが寂しさに移行していったことと思い

ます。

その後、学校からポスターが送られてきました。（図6）これには子供たちの手紙



図6

が貼ってあり、その一文を紹介すると、次の通りです。

「チョコちゃんは元気いっぱい、ごはんもたくさん食べて、みんなに声をかけられたり、なでられたり、とっても幸せだったと思います。これから、毎日、幸せに、う

れしい、幸せだなと思ってもらえるような、温かい心でお世話しようと思いました。チョコちゃんの分も、パンダやアポロ、クーちゃんに長生きして、幸せになってほしいです。チョコちゃんに一生懸命手をつくしてくださってありがとうございました。」

ふれあい授業は、生きている証拠探しから始まり、冷たく硬くなった体に触れて死を体感して完結するものではなかったのです。

死を感じることで生を感じ、「温かい心」との表現に集約され次に発展するものであると確信させられた一例です。

最後に学校獣医師として、日々、命と向き合い、命を感じているからこそ伝えられることがあります。言葉ではなく心で感じる動物たちの声。姿は違うが一緒に生きる仲間として、子供たちが小さな動物から命の尊さを学ぶ、その一助として今後がかかわっていきたいと思っています。

（社団法人石川県獣医師会）

